

新しい文化政策プロジェクト  
2021年勉強会シリーズ 第4回  
ショートレポート

2021年8月10日（火）13:30～17:15

京都大学楽友会館 1階会議室 1（Zoomとの併用開催）

参加者 ゲスト2名、一般申込み10名、メンバー6名、学生1名

第4回の勉強会は、2名のゲストをお迎えし、約4時間にわたる濃密なレクチャーとディスカッションが繰り広げられた。

1人目のゲストである高木博志先生（京都大学人文科学研究所 教授）には、「近代日本の文化財保護行政と課題」をテーマにお話しいただいた。明治維新後の文化財の制度化の過程と、「文化財と政治」や「史実と神話」をめぐる歴史的経緯を紐解き、現代の課題にまでつなげるスケールの大きなレクチャーであった。

特に2019年の百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録に関連して、考古学的学知では否定されている「仁徳天皇陵古墳」という名称が、文化庁が宮内庁に付度する形で採用され、それが世界標準となろうとしている問題について詳細に触れられた。この問題をはじめ、現在、日本遺産制度の創設、文化的景観、歴史まちづくり法等、文化財「活用」が推進される中で、真正性よりも神話や物語が優先される場面が散見されるようになってきている。21世紀の文化財政策の中で、文化財単体だけではなく、物語性や景観、風景などが重視されるようになってきていることについて、高木先生は、この視点は20世紀はじめの黒板勝美の主張にすでにみられていたことを指摘したうえで、その全てを問題視し否定するものではないという。京都府の宇治を例に、その表象の変遷をふまえて物語や景観に親しむことは何ら問題ないとお立場を示された。最後に、「誰のための文化遺産か？」という問いかけの中で、トップダウンではない、下からの実践、つまり市民が大事だと思ふものを市民の文化遺産として保護活用し、将来に伝えていこうとする実践を、生活に根ざした文化財のありようとして紹介された。

ディスカッションの話題は多岐にわたったが、大きなポイントは「物語」であり、「文化財は誰のものか」、すなわち「物語は誰のものか」、その作り手は誰なのか、ということを中心に活発に意見が交わされた。階級の解体が、上からの物語と下からの物語という、物語の作り手の変化に対して影響を与えたのかどうかという問いかけに対し、高木先生は、明治～大正期の史跡名勝保存には旧幕臣が多く関わり士族層の学問が強く影響していたこと、それが世代交代により商工業者が台頭し、大正期以降は普通の農民も「お国自慢」を共有するという具合に変化してきたことを示され、たいへん興味深い視点であった。現代も、文化財保護政策はトップダウンの仕組みを保持する一方で、2018年の文化財保護法改正に見られるように、文化財に対する地域からの主体的な方針の提示が重視されるようになってきている。

現在の観光至上主義の風潮の中で、文化財の商品化、観光化、資源化において、学知を無視した物語が重視されることは強く危惧される。しかし一方で、市民が史実とはなれた物語をまちおこしのために利用したり、アニメの聖地などフィクションとしての物語が消費されたりする例もあり、このような動きは一概に否定されるべきものでもないという見解も示された。文化財と物語をめぐっては、歴史的経緯を踏まえたうえで、史実とフィクションの違いに自覚的になり、誰による何のための物語であるのかを注意深く見る姿勢が重要であると思われた。

2人目のゲストである塚原康子先生（東京芸術大学音楽学部 教授）には、「近代日本における雅楽の位相」と題して、明治以降の雅楽の再編とその前提となった近世の雅楽復興について、長年のご研究をもとに詳細なご報告をいただいた。

武家の世でいったん衰退していた雅楽は、近世の朝儀の再興により、幕末には平安時代とほぼ同等の宮中行事がそろい、雅楽の復興が進んでいた。そのことが、明治維新以降の雅楽の再編のベースとなっているという。明治以降、皇室祭祀、神社祭祀、軍の儀礼、学校儀式など、雅楽は新しい社会における奏楽機会に対応することが求められ、近世からの楽人たちは短期間のうちに様々なことを組み替え、奏楽活動を行った。特に東京奠都は雅楽の大改革を必要とし、雅楽局の設置につながっている。また西洋音楽も兼修するようになる。このような変革は、明治維新で前の時代と分断されて新しく始まったわけではなく、近世からの担い手が新たな役割に対応して、新しい時代を切り開いていたのであるという事実を、資料に照らして非常に生き生きと伝えていただいた。

続くディスカッションにおいても、この変化の時代に対応した楽師たちの実態について、参加者から活発な質問が寄せられた。西洋文化が流入した明治時代に、いち早く西洋音楽を学び、雅楽と西洋音楽の両方を担っていた楽師たちが「音楽の中で雅楽に軸をおくのか欧州楽に力を入れるのかいつも揺らいでいたのではないか」という塚原先生の推察は、特に印象的であった。雅楽の楽師が西洋の音楽も職業として担うことは、他国には例のない、かなり日本独自のことであることも示された。

「文化政策の議論を縦と横に広げる」ことを打ち出してきたプロジェクトとして、今回の勉強会は、縦の方向、つまり歴史的に深く掘り下げることを通じ、現在の課題を考えるうえでも視野が開け、大いに刺激を受ける会となった。

（文責・朝倉由希）